



晩年の暁烏敏師

1月26日 みぞれ雪
終日『人間史論』読。夜、先生が「野本(永久・秘書)さん、昨年のように又やいと(灸)を初めてもらうか」「では今夜から」背中に火をつけたところへ、突如「先生京都から電話、鳥越(頼有)さんからです」と言って二階へ走り上がって来るものがある。

「うん、わしじゃ。あ、あ、そうか。そういう事はいやじゃ。わしはいやじゃ」という先生の返答を、その真後ろに立って聞く。先生は寒冷の板の間に寝巻一枚である。なかなか話は果てないが、事の内容は片話だけでもみなわかる。「わしは盲目でそういう事は出来ない。見当違いのわしの所へ持って来んでも、やり度い人がいくらでもあるじゃないか」併しこの語の後、いくらか先生が説き伏せ

その後、法主(現在の門首)を始め、60名の宗議会議員全員の執拗な説得が続き、二日後の1月28日「自信なけれど断わりかね、とにかくお受けいたします」という電文が打たれ、総長受諾という事で決着した。「私は盲目であり、75歳の老齢でもあり、経験もなく、到底この任に堪えぬということをよく知っておりますので御辞退致しましたが、皆さんの

引かれていられる様である。

「考えてみよ、と言ったってわしはこの通りだ、別に考えることもいらない」と言って結局長い電話が切れた。冷えきった素足で、くるりと後ろをむいて、「わしに宗務総長になれちゅうとる。随分議会がもめとるらしい。稲葉(道意)と末広(愛邦)がとことん席を争つとるが、若い議員達は動かぬぞうだ。この際白紙でなければ救えぬという人心の動きで、そこに思い出されたのが暁烏ちゃと、とんでもないことになるもんぢや」と自室へ歩き歩き言われる。(略)

念仏総長と称された暁烏敏師 (その2)

教化本部 古卿 誠幸

堅正に却くなかれ勇猛に進めと仏は教えたまへり

真宗同朋会運動50年に向けた運動の再検証。前号に引き続き暁烏敏師の歩みについて、今号では師の宗務総長就任にまつわる背景について掲載する。また「点描」では、今号から「教区定例法座」について連載する。今回は教区定例の礎となった「婦人会定例」と、布教団による定例線を統合して真宗同朋会運動の願いを反映させようとした歩みの前史。

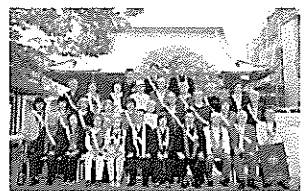
「非無」という雅号(明治28年から晩年まで主に俳句を詠んだときに使った)を持ち、多くの俳句や短歌を書き残した暁烏敏師が、宗務総長になった1951(昭和26)年正月二日に読んだ句である。終戦後間もない当時、宗門は1949(昭和24)年に厳修された、蓮如上人450回御遠忌による莫大な借財を抱え、さらに1961(昭和36)年にお迎える親鸞聖人700回御遠忌に向けての大切な時期でもあった。宗務総長就任前後のことを『暁烏敏全集』(秘書手帳)にこう記してあった。

真宗同朋会運動50年に向けて

その検証 興り(八)

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌 お待ち受け総上山

▼奉仕団 6月▲
第4組 大願寺・妙現寺お待ち受け奉仕団 28名



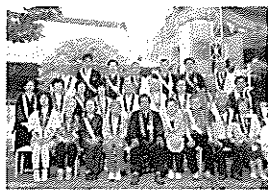
色々な人が支え合って生きている、教えに遇えたよるこびを感じました。

6/9~11
函館別院後期教習奉仕団 28名



「空過」の問題が自らの生き方に問われてきていることを感じました。

6/16~18
教区後期教習お待ち受け奉仕団 21名



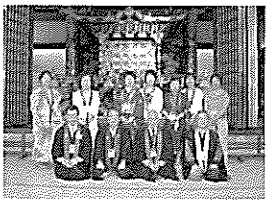
我が身のあり方を気づかせていただく聞法の意義を教えていただきました。

6/23~24
旭川別院奉仕団 41名



参加者それぞれに大切な事を響かせていただいた研修となりました。

6/24
▼一日参拝 6月▲
大谷婦人会北海道連合会理事上山 12名



真宗本廟に一日参拝し本部理事と懇談。身を運ぶことによって初めて見えてくることを改めて実感した研修でした。